

《特集 2》在日コリアンを中心とするマイノリティとその地域性について

宮 下 良 子*

Special Theme 2: Minorities with a Focus on Koreans Living in Japan and Their Communities

MIYASHITA Ryoko*

は じ め に

在日コリアン¹⁾が集住する地域は、その歴史的経緯²⁾により産業労働者として生計を立てていたことから、主に都市部であることは自明のものである。その中でもっとも人口が集中しているのは大阪府であり、2018 年度法務省在留外国人統計では、約 10 万人となっている。彼ら／彼女らは戦前から日本社会に定着し、それぞれの「地域」で異なった生活の様相を呈しているが、地域性に着目した検討は数少ない。本特集では、大阪府下の大阪市生野区、八尾市、堺市および神戸市を取り上げ、各事例にみる地域性が在日コリアンを中心とするマイノリティの生活実態やアイデンティティ形成とどのように関わっているのかを明らかにすることを目的とする。

また、本特集において執筆する 4 人はそれぞれ専門分野が異なるが、筆者自身が創立にかかわり、2009 年に発足した「こりあんコミュニティ研究会」を介し、在日コリアンおよびその周辺のマイノリティ研究を調査や研究会を重ねて共有してきたという経緯がある。まず黒木氏は建築計画学が専門であるが、特に高齢者の地域生活や QOL をもとに通所、入所施設の設計を通して福祉施設や住まい、地域環境の研究を行なっている過程で、民間の研究助成³⁾

* 大阪市立大学都市研究プラザ ; Urban Research Plaza, Osaka City University, 3-3-138, Sugimoto, Sumiyoshi, Osaka City, 558-8585 / miryo@pop06.odn.ne.jp

1) 在日コリアンの呼称は、朝鮮人、韓国人、在日韓国・朝鮮人等さまざまだが、筆者は北朝鮮および大韓民国出身者と大韓民国および北朝鮮にルーツを持つ日本で生まれた人々を包含する意味で在日コリアンと称する。しかし、先行研究や文献における呼称を使用する場合は、原文のママとしている。

2) 1910 年の日韓併合や強制連行等による朝鮮半島の植民地下状況が、多くのコリアンを日本へと流入させた。さらに、第一次世界大戦後の日本において、急速な産業化・工業化により、低賃金労働者としてのコリアンを受け入れる土台が形成され、多数のコリアンが特に大阪を中心とした商工業都市に集中した。

3) H21 年度大阪ガスグループ福祉財団研究・調査助成、研究・調査名：「在日コリアン高齢者の暮らし

を獲得し、本特集の論考である大阪市生野区の在日コリアン高齢者の研究に取り組むこととなる〔黒木 2017〕。そして、こりあんコミュニティ研究会の西成区の在日コリアン高齢者の生活実態調査研究や、大阪在住の在日コリアンの祈りの場である「龍王宮」⁴⁾の建築調査などに携わったことなどが、在日コリアン研究に関わった経緯である。

次に鄭氏は八尾市に拠点をおく、在日朝鮮人などの「外国人」支援 NPO「トッカビ」のスタッフとして、「外国人」支援と社会運動の実践に携わってきた。その経験を社会学の観点から、八尾市における在日朝鮮人運動、在日朝鮮人コミュニティの形成史等、運動と支援の現場で得た問題意識に根差した研究を継続している〔鄭 2011, 2014, 2018〕。そして中西氏は沖縄・奄美出身者などを対象として、近代日本における、主に神戸市を中心とした都市移住者コミュニティの変容過程について人文地理学の分野から研究してきた。特に、沖縄・奄美出身者はマイノリティとして周縁に置かれながら、移住地への定着過程や集住地区での集合的实践、さらにはどのようなアイデンティティが形成されてきたのかを、同郷団体関連資料やフィールドワークから明らかにしている〔中西 2007, 2012, 2018〕。

最後に筆者自身は在日コリアンのエスニシティを分析するにあたり、主に関西地域をフィールドとし、シャーマニズムや仏教の側面からアプローチする文化人類学や宗教社会学を基盤として研究してきた。こりあんコミュニティ研究会の活動拠点の一つであった龍王宮の形成から撤去に及ぶまでの歴史的経緯および在日コリアン社会にとっての存在意義やアイデンティティ形成についての役割を明らかにし、さらに奈良県の生駒山と大阪市内に展開される在日コリアン寺院⁵⁾のネットワークを体系化している〔宮下 2012a, 2012b, 2015a, 2015b〕。

以上が4人のそれぞれの専門的研究の経緯であるが、本特集のテーマに掲げた地域性を考える上で、先行研究である在日コリアンの地域研究を整理してみたい。

I 在日コリアンの地域研究

西日本における在日コリアンの地域研究については、社会学、文化人類学や人文地理学などにおいての研究蓄積が顕著である。まず、下関市における島村の研究では、1905年の関釜連絡船の開通に伴い、多くのコリアンが下関に上陸したことで、日本でも有数の在日コリアンの集住地域（トンネ）が形成されたと言及している〔島村 2000〕。しかし、下関市や川崎市、

の特性と意義に関する研究」。

- 4) 大阪市都島区 JR 桜ノ宮駅周辺の旧淀川の河川敷にあった民俗宗教施設。主に在日済州島出身者の賽神（巫儀）センターであったが、2010年8月に行政側の立ち退き要求に応じ、龍王宮の建物は撤去された。詳細は〔宮下 2011: 1-6, 2012a: 207-208〕を参照されたい。
- 5) 先行研究において、古代朝鮮シャーマニズムと日本仏教が習合した特異な宗教的観念・儀礼が展開される場を「朝鮮寺」としていたが、筆者は、仏教寺院や巫俗寺院および貸し寺等を包含する新たな呼称として「在日コリアン寺院」という語を提唱した〔宮下 2012a〕。

福岡県の筑豊ではその生活世界において、在日コリアンと日本人の生活文化の越境が見られることもあり、個々の経験に注視すべきであるとも示唆している [島村 2001]。また、福岡市の在日コリアンの集住地域では、代替団地における増築やその費用の融資などを行政に認めさせるなど、彼ら／彼女らのしたたかであくましく生きるための方法が見出せると結んでいる [島村 2010]。そして、1894 年に始まった日清戦争以降、軍都としての性格をもつ広島市 [伊藤 2018] に、1930 年代から多数の出稼ぎであるコリアンたちが流入した。同地の被差別部落民と同じく、住環境ならびに野外労働が多い性質から、在日コリアンたちも原爆の被害が大きかった。そのような歴史的経緯を背景に、現在の高齢者福祉問題を研究した安は、在日コリアンが使用している施設内において、日本人が彼ら／彼女らを疎んじる場面が多く、在日コリアン 1 世たちが寄り添う場所は大都市を中心にあると論じている [安 2011]。

その大都市であり、もっとも在日コリアンの人口比率が高い関西地域において、大阪府と奈良県の境にある生駒山と、在日コリアンが集住する大阪市内に展開されている在日コリアンの諸宗教を、その地域性から論考している宗教社会学の会 [宗教社会学の会 1985, 2012]、および飯田 [2002, 2018]、宮下 [2005, 2009, 2012a, 2012b, 2015a, 2015b] の研究がある。特に飯田は調査地を大阪市生野区の在日社会に移し、民俗宗教、チェサ（儒教的祖先祭祀）、仏教、キリスト教を通して民族的アイデンティティを分析している。

同様に、「こりあんコミュニティ研究会」は、大阪市都島区、西成区、京都市南区東九条、京都府宇治市のウトロ地区、和歌山県の関西地域を中心とした在日コリアン集住地域の調査、論考の蓄積が顕著である⁶⁾。その中の大阪市都島区には済州島系の巫儀の場である龍王宮があり、かつて、大川（旧淀川）周辺の水上生活者の中に在日コリアンが含まれ、一時期は済州島出身者の集住地が形成されていたことが確認されている [宮下 2011]。次に、西成区の調査では、在日コリアンのコミュニティが形成されていく中での就労や住まい、ネットワークを通じた生活の構築において、同郷のコミュニティが果たしてきた役割が大きく [川本 2011]、在日コリアン高齢者の外出行動では、西成という地域の利便性が外出行動を促進するとしている [本岡、平川 2011]。しかし、在日コリアン高齢者の住まいに関しては、持ち家率が高く、維持管理の問題が潜在化していることが明らかとなった [黒木 2011]。

そして、京都市の東九条は、1920 ～ 1930 年にかけて在日コリアンが移住し、京都市最大の集住地区となった。しかし、現在、人口減少や高齢化、住環境、民族をめぐる問題などを抱え、住民、当事者、ボランティア団体がその対策を模索している [石川 2011]。京都府宇治市のウトロ地区については、在日コリアンの不法占拠地区の場所をめぐる負のイメージ「宮

6) 在日コリアンの集住地域を都市型、地方型に分け、前者を西成区北西部、後者を和歌山県和歌山市、海南市、御坊市と選定し、調査を行った論考がある [全・川本・本岡・宮下・李・福本・中山・水内 2011]。

下 2010」と、「ウトロを守るヒューマン・チェーン」[斎藤 2010] からウトロ地区を媒介に幅広い連帯が作られていることが相反し、空間的分離が見られると論じている [全 2011]。最後に、和歌山県新宮市における在日コリアンの養豚経営が 1980 年代後半まで残存した要因として、個人の経営努力や市場とのつながり、土地の広さという地理的背景と在日コリアンの経営者がいかに地域社会と関係を結んできたか（残飯収集が地域の生ごみ処理）ということが結論付けられている [本岡・柴田・藤井・全 2010]。

以上の在日コリアンの地域研究は、下関市、福岡市、広島市、関西の各集住地域を調査対象とし、あるいは一定の集住地域である西成区の住まいや就労、生活世界、外出行動などの変数で在日コリアンの QOL やアイデンティティについて考察している。しかし、本特集のオリジナリティは、集住地域である関西、または阪神地域を選定し、その中でも各地域の違いを明らかにしていることである。つまり、社会学的、文化人類学的、人文地理的な対象地域に密着した集約的研究によって、それぞれの「地域性」の特徴が明確になり、基盤となる地域社会の通時的過程を総体的にとらえることが可能となっているといえよう。

II 特集の論点

本特集は、大阪府堺市における在日コリアンと被差別部落が構築する生活世界、八尾市の子ども会の権利運動、そして、済州島出身の在日 1 世、2 世が多く居住する大阪市生野区における高齢者問題、さらに、神戸市在住の奄美出身者にみる同郷性について、フィールドワークを基盤とした論考で構成されている。

まず、宮下論文は、大阪府堺市の被差別部落に混住する在日コリアン、日本人住民に対して行ったインタビューおよびフィールドワークに基づく実証的資料をもとに、堺市という地方都市、さらには都市下層社会における在日コリアンの生活世界や彼ら／彼女らのエスニシティについて考察した論考である。従来、被差別部落史研究と在日コリアン史研究は歴史的背景や権利、その他の法的諸関係が異なり、研究者自身も相互の研究資料や事例に関心を向けてこなかった。ゆえに、在日コリアンと被差別部落民との関係性についての歴史的研究の蓄積は不十分なままである。したがって、これまでその記録が脱落していた地域社会における在日コリアン、被差別部落民が構築する生活世界と、その社会空間の動態的な社会史の一端を明らかにしている。

韓国併合以降、近代商工業都市である大阪を中心とした大阪南部エリアは、低賃金労働力の大きな需要があり、朝鮮人を受け入れる土台が形成されていたことから、堺市にも多くの朝鮮人労働者が居住するようになった。1932 年、彼ら／彼女らが拡張したバラックから移転したのが被差別部落である現在の A 町だったが、日本人と在日コリアンの賃金に格差がある

ことや互いに仕事を奪うようなことが原因で、特に被差別部落内の在日コリアンに対する排外意識が植え込まれることとなった。そのような経緯の中で、部落解放運動を通して日本人と在日コリアンが協働してきたことにより、環境改善・生活保障を獲得していき、両者のそれまでの軋轢は弱まったかに見えたが、むしろ解放運動で明るみに出た日本人の在日コリアンに対する差別意識というものが再び両者の溝を深めたと思われる。

このことにより、マジョリティである日本人との関係におけるマイノリティとしての在日の葛藤、マイノリティ同士の相互関係の希薄さや反目が生み出されるプロセスにおけるマイノリティ内部の葛藤、マジョリティである日本人の在日に対する葛藤（あるいは、差別すらなかったという言説）や両者のどちらにも収れんされない主体性を介してマジョリティ内部にも生み出されている多様性というものが見出された。その結果、在日コリアンである彼ら／彼女らのエスニシティは一枚岩ではない、つまり固有の伝統文化と結びついた象徴的行為や認識の体系を共有することが少ない「狭小化されたエスニシティ」が形成されているということを示唆している。

次の鄭論文は、八尾市における在日朝鮮人コミュニティの諸相と在日朝鮮人による権利獲得のための社会運動および「トッカビ子ども会」が展開した運動について考察している。現在の八尾市の安中地域周辺には、1930 年頃から形成された朝鮮人が多数居住する「朝鮮街」があり、『八尾市史』において八尾の近代工業が撚糸業からはじまったとされていることと、朝鮮人の職として「製綿業」が多いことから、八尾の近代工業の底辺を朝鮮人が支えていたと推測している。

現在では、その他のベトナム、中国やフィリピンなどのいわゆる「ニューカマー」が集住しており、エスニック・コミュニティが形成されつつある。特に、ベトナム人の急増は「外国人材」としてメディアなどに注目され、日本社会における「共生」という視点からの関心が寄せられている。しかし、それ以前の行政は、エスニック・マイノリティを「市民」もしくは「住民」として認知せず、1970 年代後半以降、トッカビを中心とした在日朝鮮人の運動によって、公営住宅の入居や児童手当の受給などの諸権利の獲得がすすめられてきた。これにより、大阪府下自治体で初めて、八尾市一般職員採用試験受験資格の条件とされていた国籍条項が撤廃され、現在の八尾市ではエスニック・マイノリティが「外国人市民」と表現されるようになった。

このトッカビの運動とは、外国籍でも「住民」として国籍で制限されない行政措置を要求したものであり、在日朝鮮人の差異の承認と平等の両立を求めた運動である。その特異性は、外国人の課題解決のための行政施策とそのシステムを求めた「永続運動」であり、抗議だけの一過性の運動ではないということである。さらに、この一連の運動は、日本各地の在日朝鮮人の運動に影響を与えたと言っても過言ではないと論じている。

中西論文では、戦前から奄美出身者の集住地区が形成されてきた神戸における同郷団体活動を事例として、時代ごとの社会的文脈の変化に伴って同郷団体の機能や「同郷性」がいかに変容したのかを分析している。具体的な事例としては神戸において二大勢力とされてきた徳之島と沖永良部島出身者のうち、前者を取り上げている。徳之島を含めた奄美から神戸への人口移動は、第1次世界大戦時の阪神工業地帯での重工業化が急速に進展し、労働市場が拡大していった時期から顕著になった。慢性的な経済的困窮にあった奄美の中でも、特に徳之島出身者の移住にみる人口比率は高かった。

また、戦前の奄美出身者の同郷団体には、親睦だけではなく、同郷者の「修養」や「生活改善」を志向する活動があり、背景には移住地で文化的差異や経済的困窮などによる他者化された経験によるものと考えられる。しかし、日本という国民国家における境界地の出身者としての「奄美」という集合的な意識が構築されていきながら、他方では、徳之島は不利益を余儀なくされてきた。その後の高度経済成長期以降は神戸への徳之島出身者の流入が減少したこともあり、同郷団体の会員の高齢化と固定化が顕著となる。そうした中で、徳之島出身者のネットワークの紐帯として、徳之島の舞踊である夏目踊りや浜踊りを中心とする文化活動団体が重要な役割を担うようになる。しかし、ホスト社会から受けた生活習慣に基づく偏見や他者化の経験は、奄美出身者に、日本「本土」やその都市空間である神戸への同化を志向させた。

一方、現在では、同郷団体や関連する文化活動団体の日々の活動自体が同郷者ネットワークの維持と再生産の機能を果たし、対面的関係の紐帯としての役割を有している。これは地縁に基づく出身地での関係性の延長というよりも、神戸で出会った同郷者が当地で構築、維持していった相互関係性を基盤としているといえる。単なる「奄美」や「徳之島」というカテゴリーに回収される存在としてではなく、あくまで神戸という移住地を基盤、または「ホーム」とする生活経験を前提として、徳之島出身者の同郷者ネットワークと生活世界は位置づけられると結論している。

最後の黒木の研究ノートでは、専門としている建築学的視点から、在日コリアン1世が高齢化する中で、彼ら／彼女らが集住している大阪市生野区のデイサービスの利用において、同胞意識や暮らしの経験、地域性が生活の中でどのような影響をもたらしているのかを明らかにしている。調査対象は、生野区にあるデイサービスのSa（定員20名で、利用者は全員、在日高齢者）、Mu（定員25名で、利用者は5割が在日高齢者、残り5割が日本人高齢者）、Ha（定員47名で、利用者の内訳はMuと同じ）である。特にSaにおいては、その立地性や近隣に地域資源が多いことや近所からの在日高齢者の利用者が多いことなどから、一般的なデイサービスとは異なる場となっている。こうした暮らしに密着した要素（情報）や利用者同士の共通性がデイサービスに持ち込まれる事によって、利用者の主体性のある過ごし方や、賑わい・活気を生み出し、多様な質・内容のコミュニティを作り出している。また、そ

のコミュニティによって、高齢者同士の安否確認・相互扶助が生み出され、介護サービスのみに依存しない、地域のヒト（同胞・知人）・モノ（地域資源）・コト（コミュニティ）を基調とした暮らしを実現させている。こうしたデイサービスは、言わば地域の「寄り合いの場」となっており、他のデイサービスとは質の異なる、「脱施設の場」・「高齢者の暮らしに密着した場」となり得ていると言及している。

お わ り に

本特集の事例地域は大阪を中心とした阪神地域であるが、各事例地域は 20 世紀初頭の東アジア有数の工業都市という磁場としての特性から漏れず、それらのインナーシティには朝鮮半島および沖縄・台湾からの移住者が多く流入してきたという特徴がある。各地域に集住地区が形成され、第二次世界大戦直後の在日コリアンたちの帰還や高度経済成長期以降の奄美出身者（特に徳之島出身者）の流入の減少という時期を経て、本特集の各論考が明らかにしたように彼ら／彼女らの集住地域における生活実践は今なお展開されている。

しかし、在日コリアンは、1952 年のサンフランシスコ条約によって日本国籍がはく奪され、市民権が制約される中、深刻な住宅・就職差別にも遭遇した。本特集の事例において住宅問題は、在日コリアンを堺市の被差別部落への流入へと促進し、就職差別は八尾市の部落解放運動に触発されたトッカビの権利獲得運動へとつながっている。この部落解放運動は、日本人主体の運動に内在していた在日コリアンへの差別意識によって堺市 A 町の被差別部落内における日本人と在日コリアンの軋轢を生み、八尾市におけるトッカビ運動に見る在日コリアンの在日コリアンのための権利獲得運動はエスニック・グループ内の紐帯を強めたといえるだろう。

同様に、国内移民〔水内・加藤・大城 2008: 314-318〕とされる奄美出身者は同郷団体を介し、移住先である神戸における生活経験をもとに対面的関係性を構築・維持している。そして、済州島出身という同郷人のネットワークを利用した連鎖移民が多く集住する生野区における高齢者のデイサービスについては、インナーシティでのレジリエンスの観点からは逸れるが、高齢者福祉などの「跳ねない安楽なベッド＝楽ベッド」⁷⁾の役割という点からは民族を問わず喫緊の課題である。しかし、生野区の在日高齢者の利用者で構成されているデイサービスは、他のデイサービスとは質の異なる、「脱施設の場」・「高齢者の暮らしに密着した場」を創出し、地域のヒト（同胞・知人）・モノ（地域資源）・コト（コミュニティ）を基調とした暮らし

7) 対概念として「跳ねるトランポリンのようなベッド＝跳ベッド」があるが、その意味は不利な状況の中で社会経済的上昇の機会を提供するというもの〔福本 2017: 73-74〕。つまり、「楽ベッド」とは、社会的上昇とは無縁な状態を指す。

しを実現させている。

以上が本特集のまとめであるが、最後に本特集において重要な概念である「地域性」というものを、他の地域とは異なる性質やその地域に特有の現象を指すものとしたら、各論考を横断的に考察することでその一端が明らかになっていれば幸いである。また、本特集の事例研究の今後の課題として、1980年代以降に渡日している、または今後も渡日してくるニューカマーの移動性の高いトランスナショナルな動向を注視していく中で、改めて「地域性」を問うていきたいと考える。

謝 辞

本特集の論文は第12回白山人類学フォーラム(白山人類学研究会主催 2019年11月23日)において報告した内容をもとに執筆したものであるが、コメンテーターの伊藤亓人先生(東京大学名誉教授)、野村伸一先生(慶應義塾大学名誉教授)には貴重なご意見を賜った。また、雨天の中、参加いただいたみなさまにはこの場を借りて感謝の意を表したい。

付 記

前述のフォーラムで報告がなされたのは以下のとおりである(敬称略)。

黒木宏一 「大阪市生野区におけるデイサービスを拠点とした在日コリアン高齢者の地域生活とその特性」

鄭 栄鎮 「八尾市における在日朝鮮人コミュニティの形成とトッカビ子ども会をめぐる権利運動」

中西雄二 「国内移民の定着過程と『同郷性』——神戸在住奄美出身者の事例から」

宮下良子 「被差別部落に混住する在日コリアンのエスニシティ——大阪府堺市の事例から」

参 考 文 献

安錦珠

2011 『『在日一世女性』の高齢福祉問題を生活史から読み解く——広島市西区福島地区の通所施設利用者を事例として』『コリアンコミュニティ研究』2: 104-112.

石川久仁子

2011 「東九条におけるコミュニティ実践の集積」『コリアンコミュニティ研究』2: 48-56.

伊藤泰郎

- 2018「広島における外国にルーツを持つ人々」『都市と地域の社会学』森岡清志・北川由紀彦（編），183-203 ページ，放送大学教育振興会．

川本綾

- 2011b「大阪市西成地区のコリアンコミュニティの形成と変容」『コリアンコミュニティ研究』2: 15-18.

黒木宏一

- 2011「西成区北西部における在日コリアン高齢者の住まいの現状と課題」『コリアンコミュニティ研究』2: 24-29.

- 2017「結——高齢者が地域で暮らすということ」『楽しもう家政学——あなたの生活に寄り添う身近な学問』『家政学のじかん』編集委員会（編），49-58 ページ，開隆堂．

斎藤正樹

- 2010「ウトロ——強制立退きから新しいまちづくりへ」『コリアンコミュニティ研究』1: 37-45.

島村恭則

- 2000「境界都市の民俗誌——下関の＜在日コリアン＞たち」『歴博』103: 16-19.

- 2001「＜在日朝鮮人＞の民俗誌」『国立歴史民俗博物館研究報告』91: 763-790.

- 2010『＜生きる方法＞の民族誌——朝鮮系住民集住地域の民俗学的研究』関西学院大学出版会．

宗教社会学の会（編）

- 1985『生駒の神々——現代都市の民俗宗教』創元社．

- 2012『聖地再訪 生駒の神々——変わりゆく大都市近郊の民俗宗教』創元社．

全ウンフィ

- 2011「マイノリティの居住空間から集合的な記憶の場所へ——在日コリアンコミュニティ・ウトロ地区を事例として」『コリアンコミュニティ研究』2: 97-103.

全泓奎・川本綾・本岡拓哉・宮下良子・李度潤・福本拓・中山徹・水内俊雄

- 2011「社会的な不利地域における共生型まちづくりに関する研究——在日コリアンコミュニティの地域再生と居住支援」『住宅総合研究財団研究論文集』37: 49-60.

鄭栄鎮

- 2011「在日朝鮮人の権利獲得運動，その駆動力と条件——トッカビ子ども会の事例」『コリアンコミュニティ研究』2: 57-64.

- 2014「地域コミュニティにおけるルーツ語教室の可能性」『コリアンコミュニティ研究』5: 92-99.

2018『在日朝鮮人アイデンティティの変容と揺らぎ——「民族」の想像／創造』法律文化社。
中西雄二

2007「奄美出身者の定着過程と同郷者ネットワーク——戦前期の神戸における同郷団体の事例から」『人文地理』59(2): 173-187.

2012「大阪市西成地区における沖縄出身者の定着過程と県人会活動」『コリアンコミュニティ研究』3: 32-39.

2018「同郷団体活動の変容と文化的表象——神戸における奄美出身者の事例をもとに」『文明研究』37: 25-47.

福本拓

2017「在日朝鮮人集住地区の歴史的ダイナミズム」『都市の包容力——セーフティネットシティを構想する』水内俊雄・福本拓（編），66-76 ページ，大阪市立大学都市研究プラザ。
水内俊雄・加藤政洋・大城直樹

2008『モダン都市の系譜——地図から読み解く社会と空間』ナカニシヤ出版。

宮下良子

2005「越境するシャーマニズム——在日コリアン一世女性の事例から」『韓国朝鮮の文化と社会』4: 55-85.

2009「済州スニム（僧侶）のトランスナショナリティ——大阪市生野区の事例を中心に」『白山人類学』12: 35-51.

2010「ウトロ地区のこれまでの歩みとこれからのまちづくり」『国土交通省平成21年度住まい・まちづくり担い手支援事業「在日コリアン・コミュニティの持続型居住を実現する住環境整備計画策定活動」活動報告集』，40-41 ページ，一般社団法人ウトロ町づくり協議会。

2011「龍王宮の空間が語るもの」『コリアンコミュニティ研究』1: 1-6.

2012a「在日コリアン寺院の新たなアクション——その先へ」『聖地再訪 生駒の神々——変わりゆく大都市近郊の民俗宗教』宗教社会学の会（編），187-214 ページ，創元社。

2012b「在日コリアン寺院——ローカリティ／トランスナショナリティの視座から」『叢書宗教とソーシャル・キャピタル』大谷栄一・藤本頼生（編），94-119 ページ，明石書店。

2015a『『朝鮮寺』から『在日コリアン寺院』へ——コロニアル／ポストコロニアル状況における在日コリアンの宗教的実践』『人文学報』108: 49-63.

2015b「接続するローカリティ／トランスナショナリティ——『在日コリアン寺院』の信者の語りを中心として」『東アジア海域文化の生成と展開——＜東方地中海＞としての理解』野村伸一（編），633-668 ページ，風響社。

本岡拓哉・柴田剛・藤井幸之助・全ウンフィ

2010 「戦後における在日コリアンによる養豚経営と地域社会——和歌山県新宮市を事例に」『コリアンコミュニティ研究』1: 21-30.

本岡拓哉・平川隆啓

2011 「西成に暮らす在日コリアン高齢者の生活活動」『コリアンコミュニティ研究』2: 19-23.

〔ウェブサイト〕

法務省

2019 「2018 年 12 月末 在留外国人統計表」2019 年 10 月 3 日アクセス.
http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html